

はじめに——本書のねらい

本書は、21世紀の人間社会が直面する共生という課題を考えるものである。

この課題についてはすでに多くの書物が刊行されており、理念の検討のみならず、草の根での取り組みから行政による施策に至るまでの現実的な取り組みの提示がなされている。その中にさらに本書が加わろうとすることには、主として2つの意図がある。

第1には、この課題に関して教育に何ができるのかを可能な限り多面的に描き出すこと。

第2に、共生というスローガンに疑問や批判も向けられるようになった後にも、なおこの課題が社会的に掲げられていることの意味を、可能な限り吟味し表現すること。

第1の点は、人間の活動としての教育の本来的な性質に関わる。教育とは、人と人をつなげる営みである。我々は学ぶことで他者と情報を共有することができ、また教えることによって他者との協働ができるようになる。異なる背景をもち異なる経験をしてきた人間同士が、世代さえ超えて新たにつながり合うところには、必ず教育が位置している。そのように考えれば、教育とはそもそも共に生きることを目指す行為であり、この課題に最も親和的な営みということになる。人間社会の多くの面で現に行われている教育を、共生の理念に照らしてみることで、この課題の追究にとっての重要な歩みを見取ることができるはずである。

第2の点は少し複雑である。共生という言葉はすでに日常語としても、政策用語としても広く定着している。それに伴って、この言葉を用いることに対する疑問や批判も提示され始めている。共生の掛け声のもとに目指される相互理解や社会統合が、実際には教化や同化にほかならないケースが多々あるからだ。学校教育についても同じことがいえる。人びとのつながりが生み出される一方で、具体的な学校の場合は人と人との様ざまなせめぎ合いの舞台でもあり、お互いの相容れなさが却って見えてしまう場でもある。ある人にとって、誰かとつながる可能性が広がることは、同時に、別の誰かとつながる可能性を遠ざける

ことでもあるかもしれない。共生という課題を考え論じる際には、共生を掲げる営みをもたらす予期せぬ結果についても、引き受けなければならない状況に至っているのである。

本書では、そのように共生という言葉が批判されるのであれば、この言葉をさらに吟味した上で何を考えうるのかを追究してみたいと思う。綺麗事を並べるだけではないのかと疑われたりしながらも、この言葉がなお社会の中で使われ続け、人びとに一定の説得力を示すことには、何らかの意味があるはずである。もちろんその意味をすくい取ることは、通り一遍のものの方だけを採用していたのでは難しいだろう。学校や社会をいつもと違う角度から見直し、これまでの考え方や議論の仕方がもっていた限界についても自覚する必要がある。本書は、共生をめぐるこれまでの議論が明らかにしてきた学校や社会の問題をも基点とし、共に生きるための教育のさらなる課題や、利用可能な資源についての討議を促すことを目的としたい。

以上のねらいをもって共生について考えることで、本書は2つの側面から、この理念がもたらす希望を提示できると考える。その1つは、まさに教育が作用することによって形を成す共生そのものである。人びとのつながりをつくり出す可能性という希望である。

それでもう1つは、共生の概念を吟味し、共生の理念を掲げて思考することによって見えてくる希望である。共に生きることの実際的な難しさや、共生という言葉を用いることで見えなくなってしまう問題について考えた上で、それでもなお、だからこそ、そこに見出しうる可能性である。

本書が『共生と希望の教育学』と題するのは、これら二重の意味での「共生がつむぐ希望」を検討したいからである。これまでの共生社会論や共生のための教育論が指摘してきた問題や限界を經由しつつ、なお教育を通して希求されなければならない事柄が存在することを示すことが、本書の全体としてのテーマである。

したがって各章は、この全体テーマに関わる形でそれぞれの題材について論じ、研究上の問いとその解き方、あるいは社会的な問題の所在とその解決の方向性を発信する。まず第1部「共生とはなにか」では、そもそも共生という観

点から教育が検討されなければならない理由および問題の所在を明示する。共生の理念が示す希望を整理するとともに、この概念が含意する問題についても、このパートで検討することになる。

以降、人間の相互の関係をマイクロなものからマクロなものへと幅を広げつつ論じていく。第2部「人と人がつむぐ共生」では、共生という観点から人間の生き方・関係づくりについて考える。現代における人間関係にどのような問題が生じ、それへの取り組みがいかに進行しているのかを論じる。第3部「共生のフィールドとしての学校」では、とりわけ組織としての学校のあり方に着目し、これまでにむしろ学校教育によって生み出されてきた問題を取り上げるとともに、組織のあり方の変化によって異なる人間の関わり・つながりが取り結ばれるようになってきていることを論じる。

第4部「社会との連帯、社会の連帯」では、教育活動が社会を生み出す原動力になっていることを取り上げ、その意義を論じる。教育によって社会そのものが創発することの実際の様相を提示する。そして第5部「国民教育をこえて」では、特にネイション（国民）という集団のレベルでの共生問題を取り上げ、その克服のために各国で取り組まれていることを紹介するとともに、国民教育の視角の刷新について論じる。

なお本書では、各章の論考に関わる文献や資料の情報を本文中および脚注に示す方式を採っている。これは、本書での話を進めていく上で必要となるものを、できる限り読者の方々に目に留め、意識していただきたいからである。すでに述べたように、共生をめぐる議論は広く厚く存在しており、そうした議論の総体を理解することが、この課題を考えるためには不可欠となる。

また各章末には、その章の内容全般に関わる文献と、その章の論考のさらに先にある議論を理解するために参考になる文献について、書誌情報を挙示することとした。各章の内容をより深く理解するために、ぜひ、挙げられた参考文献をさらに辿って、それぞれの課題を共有していただけると幸いである。

2011年1月

岡本智周